

まれて素晴らしいものとなりました。このフランスセミナーを通して自分のフランス語の実力を知るとともに、そしてそれをどう伸ばしていくかというすべを見いだせた気がします。そしてこれからもフランス語を学び続けるモチベーション上昇にもつながったので、このセミナーに参加して本当に良かったと思いました。



異文化にふれて

文学部3年 菊山 紋加

大学での専攻が英語、という理由だけで決めた1ヶ月間のカナダ留学。

時差16時間という遠い地。言語も違えば文化も違う。そんなカナダで経験したことを書きたいと思います。

みなさんのカナダのイメージはなんですか。わたしはメープルシロップとサーモンくらいしか思い浮かびませんでした。カナダへ行ってみてわかったのはその自然の豊かさと、その自然と街の融合です。わたしの通った語学学校

は都市部のバンクーバーに位置していました。東京に匹敵するくらいの街でしたが、少し歩けば、海がみえ、自転車に乗れば世界の公園一位に選ばれたスターレーパークへ行くことができる。写真は学校からすぐの景色です。



そんなカナダには多くの人種の人々が暮らしています。日本では海外から来た人は肌の色の違いや、顔立ち、言語などによって目立ってしまいます。しかし、多くの人種が混同するカナダでは人種の壁はありませんでした。私のクラスには様々な国の人がいたのでクラスメイト達と母国について話したり、その国の伝統的な食べ物を食べたりしました。みんな自分の国のことを教えてくれたので、毎日楽しくランチタイムを過ごせました。

英語のほうですが、私のホームステイ先には多くのルームメイトがいたため、英語で話す機会が多かったです。ルームメイトたちと夕食後におしゃべりをするのが日課でした。ネイティブの方は英語を話すのが早いため、最初は戸惑いましたが、生活しているうちに段々聞き取れるようになりました。語学学校では発音や、英



語のニュアンスの違いについて学び、習ったことを使って、ディスカッションしたりしました。誰と話すにも英語をつかうため、一か月だけでも英語は上達すると思います。

最後になりますが、私にとってこの留学はとてもいい経験となりました。英語の生活にどっぷりとつかり、様々な国の人々との交流によって今までよりも成長できました。



ことばの旅

—「自由」という語について—

経済学部 葛谷 登

明治以降、近代日本の日常生活の中で「自由」という語がよく出て来ます。しかしこの語が実際どのような意味であるのか、実によく分からないのです。この語の意味を考えようとするとまるで素手でウナギを捕まえるような焦燥感に陥ります。

三省堂の『新明解国語辞典』の第五版の「自由」の項には、「他から制限や束縛を受けず、自分の意志・感情に従って行動する（出来る）こと。また、その様子。〔民主主義社会では、社会秩序を乱さぬ限り、その人の主体的な意志・判断に基づく言動の認められる権利を指す。…〕」（628頁）とあります。

「世界の危機の根源を西洋的な合理主義にもとめ、それを克服するものは、東洋的叡智を除いて外にはないという文明論にもとづいて、コスモポリタンの活動を展開した。」とされる鈴木大拙（1870-1966）（三省堂『コンサイス日本人名事典』第5版、722頁）は、『東洋的な見方』という本の「自由・空・只今」という文章の中で「自由」についてつぎのように述べています。

元来自由といふ文字は東洋思想の特産物で西洋的な考へ方にはないのである。…それを西洋思想の潮のごとく輸入せられたとき、フリーダム (freedom) やリバティ (liberty) に対する訳語が見つからないの

で、そのころの学者たちは、いろいろと古典をさがした末、仏教の訳語である自由を持つて来て、それにあてはめた。…西洋のリバティやフリーダムには、自由の義はなくて、消極性をもつた束縛または牽制から解放せられるの義だけである。それは否定性をもつてあて、東洋的自由の義と大いに相違する。

（岩波『鈴木大拙全集〔増補新版〕』第二十巻、230頁）

つまり、明治以降フリーダムやリバティの訳語として「自由」という語が用いられようになったというわけです。

米国の宣教師ヘボン（James Curtis Hepburn、1815-1911）は「'67（慶応3）日本最初の和英辞典『和英語林集成』を刊行」（三省堂『コンサイス世界人名事典』第3版、887頁）している。1886年（明治19年）に出た『改正増補和英語林集成』（第3版、復刻版、講談社）の‘FREEDOM’の項は「Jiyū」（842頁）、すなわち「自由」、また‘LIBERTY’の項は「Jiyū, jizai, jishu」（868頁）、すなわち「自由、自在、自主」となっています。

また同辞典の‘JIYŪ’の項は「Freedom: liberty; free, at one's own pleasure; without constraint; voluntarily; convenient:」（228頁）となっています。

C.O.D.の第六版では‘freedom’の項は“Personal